

こゝに収めたものを大別すれば、執筆の時期、および内容からいつて、三つに分けられる。第一は「日本および日本人」と「文化とはなにか」であり、第二は「愛とはなにか」であり、第三は「民衆の心」「一匹と九十九匹と」「理想人間像について」「人間の名において」である。

第三に属する四つの論文は戦争直後一、二年の間に書いたものであるが、そのうちでも「民衆の心」は年譜にあるとほり戦後最初のものとして憶ひ出が深い。記録によれば、昭和二十年十二月五日に書いてある。のちに評論集『平衡感覚』に収めた。他の三つは『近代の宿命』に収めてある。處女出版は作家論ばかり集めた『作家の態度』で、『近代の宿命』『平衡感覚』はそれぞれ第二、第三の評論集といふことになる。前者は昭和二十二年十一月に金澤市の東西文庫といふ出版社から出てゐる。出版社といふほどのものではなく、岸原清之進といふ人の個人的な仕事であつて、舊友の白崎秀雄がその人を紹介してくれたのである。その話が決つて、金澤に原稿を送つた直後、臼井吉見を通じて筑摩書房から出したいといふ好意的申出があつたのをおぼえてゐる。東西文庫は間もなく潰れ、その後の消息を聞かない。

『平衡感覚』はそれより一月おくれて、同年十二月に眞善美社から出版された。これも潰れたが、當時は花田清輝を参謀とする前衛派の根據地の觀があり、なかなか活氣のある派手な出版社であつた。私のやうな保守派はその前衛的出版目録中、唯一の例外だつたのである。

『近代の宿命』には戦後に書いたものばかりを集めたが、『平衡感覚』には戦争中に書いたものも

五篇ばかりはいつてゐる。戦後のものは、兩者とも同質の論文である。なほ、同じ系統に属する評論集は、この二著のあとに、『白く塗りたる墓』（昭和二十三年十二月・河出書房刊）と『小説の運命』（昭和二十四年八月・角川書店刊）とがあるだけで、自分でいふのはをかしいが、省みると、このあたりで私の仕事の第一期はその圓環を閉ぢてゐるやうに思はれる。それが大體どんな仕事か察してもらふために、また年譜の補足のためにも、四著に収められた論文の題目を執筆年代順に並べておく。

批評家と作家との乖離	昭和十六年六月	平衡感覚
* 諷刺文學について	同 十一月	同
私小説のために	昭和十七年五月	同
批評の正しい読み方	同 六月	同
* 素材について	昭和十八年十一月	同
文藝批評の態度	昭和十九年一月	同
* 民衆の心	昭和二十年十二月	同
* 職業としての作家	昭和二十一年四月	近代の宿命
* 表現の倫理	同 六月	同
公開訊問	同 九月	平衡感覚
* 人間の名において	同 十月	近代の宿命
自問 自答	同	平衡感覚
私小説的現實について	同 十一月	近代の宿命
* 一匹と九十九匹と	同	同

決してさうではない。いづれ徐々に解説する。たゞこのポレミックだつた時期にも、二十篇餘りの作家論を書いてゐることを附け加へておく。そのうち日本の作家を扱つたものは、この評論集の第三卷『作家論』に収録し、西洋の作家を扱つたものは、第二卷『人間・この劇的なもの』に収録することになつてゐる。なほ右表のうち、*印があつて、この巻にないものは第一卷『藝術とはなにか』に収めてある。この巻の論文と同時期のものであり、大體同質ではあるが、むしろ文學論・藝術論と見なしうるものだからである。

さて、この巻に収めた論文だが、今いつたやうに當時の場が解らないと、十分に理解してもらへぬふしがある。正直な話、書いた私にも、かなり縁遠いところもあるのである。たまには自分にも解らぬところが出てくる。また、その當時は場の雰囲気誰にも解つてゐた言葉が、今になつてみると、解らなくなりしはせぬまでも、當時の重みを失ひ、その色あひもぼやけてきてゐるのである。

「近代自我の確立」とか「自己完成」とか「政治と文學」とかいふ言葉がそれである。なるほど、文字どほりの單語の意味はわからうが、それを合ひ言葉のやうに口にしてゐた私たちの情念や気分は、もう今の人にはわかるまい。その點、明治末年の文壇用語「人生」「懷疑」「時代閉塞の現状」などと同断である。そのほか措辭、文體、論理、いづれも未熟で、今これを公にすることは、誰よりも當人の私にとつて恥ぢさらしである。當時の場とそれに特有の用語とを使つて、つまり他人の言葉を用ゐながら、それをそのまま自分流の言葉にすりかへて喋つてゐるため、ずるぶん獨合點のところがある。だが、それは今から見てさう思ふのだが、當時は結構本氣だつた。

それなら、この時期に書かれたポレミックな私の論文は、すべて過渡的なものに過ぎぬであらうか。いや、過渡的なもので一向さしつかへないのだが、今それを私の評論集の讀者に讀んでもらふ

値うちのないものであらうか。私はさうは思はない。私にはいさゝかの自負がある。當時の場のなかで、當時の話題について語りながら、その場そのものに、その話題そのものに、私はもつぱら抵抗してゐたつもりだ。いひかへれば、私はそれが過渡的な場でしかなく、「近代」とか「自我」とかいふ言葉に人々が感じてゐる重みも色あひも戦争中の反動でしかないと思つたのである。その主觀的な情念のために、「近代」の限界も「自我」の正體も見えなくなつてゐることを、私は一所懸命に説得しようとしてゐたのだ。その意味では、『一度は考へておくべき事』の解説で述べたのと同じやうに、これらの論文も本質論なのである。すくなくとも、私が自分の神輿をかつぎだすための交通整理だつたといへよう。

結果としてさうなつたのだ。計畫的にはじめから神輿のかつぎだしを用意してゐたのではない。交通整理をやつてゐるうちに、どうしても自分の神輿をかつぎださねばならぬはめになつたのだ。その自覺とともに第一期からの脱出運動がはじまる。昭和二十三年の夏に書いた戯曲『最後の切札』がその現れである。それから昭和二十八年の外國旅行前までを第二期とする。みづから神輿と稱するのはをがましいが、この間に私は私なりのそれらしいものをかつぎだしたつもりである。小説「ホレイシヨ―日記」をはじめ幾つかの戯曲を書き、また『藝術とはなにか』を書きおろした。それらについては、そのつど解説する。

「愛とはなにか」もこの第二期の仕事である。なにも神輿かつぎばかりをやつてゐたわけではない。結構、文學者として「社會的責任」も盡したはうである。「愛とはなにか」は、もと、世にいふチャタレイ裁判の最終辯論として書かれたものである。チャタレイ裁判の第一回公判は昭和二十六年五月八日に開かれた。問題の書、ロレンス作・伊藤整譯の『チャタレイ夫人の戀人』（小山書店